

道

2021・5・26

通信 No 1636



ア
ダ
ン

《吉野町市民プラザは5丁目》

3丁目には母の実家がありました。

横浜大空襲の4年あとに子ども5人と引っ越してきました。

2丁目寄りにはダンスホールが。その奥一帯は花街。その花街へ母はお花を生けに行っていました。1年後に前軒の飲み屋から出火。小6になる前の3月でした。母の桐のタンスのおかげで後のち少々たすかりました。

そんな頃に街からラジオから耳にしたうたを順不同で上げてみます。上海帰りのリル 異国の丘 長崎の鐘 悲しき口笛 憧れのハワイ航路 らんこふじさわ ポール・ロブスン……。

先ごろラジオで、三輪明宏の解説で懐かしい歌を流していました。「別れのブルース」の淡谷のり子に酔い痴れたりするわたくし。

このような下地のおかげさまで、ロシアのうたを40年間うたっています。

S1 阪 澄子

《投稿》 =40年前のロシア= N03 福本三朗

今では携帯電話で世界中と通話でき、インターネットで情報収集やLINE通話も難しくはないが、当時はそんな便利な通信手段は皆無であった。留学時日本の家族に送金依頼の電話をしたとき、殺風景な電話局のロビーでオーバーに身をくるんで2時間の間“冬眠”したこともあったが、今では懐かしい思い出となっている。マロース(厳寒)忍び寄るモスクワ大学のそばで、恰幅のよいおばちゃんから「アンタ、早く帽子かぶりなさい」と叱られたことも。

当時の“計画経済”において一般消費財の需給が十分でないことがあり、例として住居のバスタブ栓が不足し、寮では両足を栓代わりにして体をあらうこともあった。またトイレットペーパーは普段街中にはなく、行列の人気品目であった。モスクワ市内の公共施設のトイレに「プラウダ」(ソ連邦共産党機関紙)が切って置かれていたことも。街中に喫茶店などない時代で、外国人にとってはお茶飲むことよりも、トイレの確保が重要な関心事であった。

2019年5月モスクワとサンクト・ペテルブルグを巡った際、サンクト・ペテルブルグからモスクワまで豪華寝台列車“赤い矢号”を利用、記念グッズもあり、異国情緒を大いに楽しむことができた。この列車はソ連時代から変わらず列車マニアにも人気がある。フライト・ホテル・列車・バレー鑑賞などを事前にネット手配できたのには隔世の感がある。

ロシアは“近くて遠い国”。ロシア民謡を口ずさむとき、ロシアの今昔にも思いを馳せながら楽しみたいものです。人類が新型コロナウイルスに早く打ち勝って、ロシア民謡のルーツをたどるロシア旅を計画したいものですね。



運営委員会 6月2日(水)午後2時30分～
県民サポートセンター 708号室